

2003年3月31日第6回証人訊問の公判で訴える

私は24期と28期の卒業生の二人の母です

元PTA副会長

6年間にわたり PTA 実行委員会に携わり、高槻南高校の事実上の廃校が決定されました、平成13年度 PTA 副会長をしておりました。その間、保護者や生徒、先生、同窓生など大勢の高槻南高校関係者の皆さまとともに活動交流をさせていただき、高槻南高校の校風や伝統そして教育環境などの良さを肌にしかに感じてきました一人として、今回の廃校がいかに理不尽であるか、また子供たちの心を傷つけてきたかを中心に意見を述べさせていただきたいと思います。

また、今日ここに立つべく当時の PTA 会長が仕事の都合でどうしても出廷することができず、会長の思いも代弁させていただきます。

私が高槻南高校が対象校となったのを知ったのは(案)発表の2日前、29日の当時の PTA 会長からの電話でした、会長はその前日の夜だったそうです、しかしこんな重大なことを隠しておくことができず、29日の朝すぐ連絡くださったのです。予期せぬ事態に頭の中が真っ白になりました。まさか高南がと言いますのも、この教育改革プログラムは、中退率の高い府立高校を見直し魅力ある学校づくりを目指すと聞いてましたので、中退率もきわめて低く、クラブ活動も活発で、府立高校としては珍しく国際交流も10年続いており、明るい雰囲気の中子どもたちがのびのびと高校生活を送っていた学校でしたので。

近年受験者も増え続けていた状況でした、思いも寄らない、そしてあまりにも唐突で衝撃的な出来事に、驚くと同時に何よりも子ども達が学校生活に様々な不安を抱えざるを得ない、この大きな決定について、事前に何の説明もなく、どうして高槻南高校なのかとの思いを強く持ちました。

夜も眠れず迎えた30日、その日のお昼すぎ、何の巡り合わせか滅多にといえますか、6年間でたった一度きりでしたが、家の近所でわが子の同級生でもあり、同じクラブの高南生の女の子が、楽しそうにおしゃべりしながら、帰宅しているところに出会いましたが、あと数時間後のニュースで、この子達の顔から笑顔が消えるのかと思うと胸がつまり声をかけることもできませんでした。

そして無情にも夕方のニュースで子ども達は自分たちの学校がなくなることを知られました。

その日の夕方、PTA 役員が集まり今後のことについて協議しました。そのときに生徒達の有志や先生達がすぐさま廃校反対の会を作られたことを聞き、早速に PTA の臨時総会を開催し、保護者の意見、要望を聞き PTA としての対応をしていかなければならないと思いました。

しかし、31日になっても、何も学校から連絡がなかったため他の5役と一緒に学校長に会いに行き、そこで言われたことが「反対運動はしないでください。前向きに考え反対運動するエネルギーを新校に向けてほしい。」でした。2年間教頭として引き続き学校長になった際、拍手で、子ども達から祝福を受けた人の言葉とは思えませんでした。

9月1日の実行委員会では、学校長からの説明を聞いても「なぜ、高槻南高校が、対象校なのか」「なぜ、全日制単位制高校に統合されるのか」ははっきりしないし納得できないので、保護者対象の説明会（府教委の出席を要望）の開催を要請するとともに臨時総会の開催を決定しました。日時は9月14日午後7時から説明会、終了後臨時総会を開くことになりました。

9月14日学校長による説明会と PTA 臨時総会が開かれ、会場の体育館は400人以上の保護者でいっぱいになり、関心の高さが良く分かりました。しかしながらこの説明会でも学校長からの説明は、相変わらず府教委が出している文書に基づいたものであり、質疑応答もしかりの状況でした。一方臨時総会前には、生徒会役員や生徒からの訴えをじかに聞く機会があり、高何を愛する子ども達のひたむきな姿は、会場にいた誰もが感動をおぼえずには居られませんでした。その後の臨時総会では、次のような決議（案）

- (1) 8月30日に発表された大阪府教育委員会の「全日制府立高校特色づくり・再編整備第一期実施計画第3年次実施対象校（案）」について、府教委の担当者に直接詳しい説明をしていただけるよう要求します。
- (2) 「高槻南高校の存続を求める運動」を会員の創意・工夫をいかして展開していきます。
- (3) 高校の主人公である子どもの気持ちを大切に、子どもたちと共にこの問題を考え、「統合計画（案）」の内容と私たち（生徒・保護者・教職員）の思いを広く府民に伝えていきます。

と署名活動などの行動提起が満場一致で採択されました。

次に教育委員会の説明は、新校は、「2校を統合し、それぞれのよいところや伝統を引き継ぎことになるのであるから、廃校ではない」との意見に終始していました。誰しもが分かる言葉だけのごまかしの説明に納得できる者はいません。しかし、歴史も伝統も全く異なる学校を一つにして、それぞれの伝統を

引き継ぐということは、現実には誰が考えても無理な話であり、校名も校地校舎も使われない高槻南高校は、廃校以外のなにものでもないと思います。事実、槻の木高校には、高槻南高校の伝統や教育課程継承の片鱗も見られないといわれています。それは検証すればすぐ分かることです。空疎な言葉だけを連ねて、実態や現実との大きな隔たり・矛盾を率直に認めることがどうしてできないのでしょうか。大阪府の教育行政は、子供たちに対しても、父母に対してもきわめて不誠実で、教育的にみてもいい加減だと思います。

反対運動の一区切りとでも言うか、平成13年11月15日、府教育委員会議での決定を控えた前日、バス3台150名の子どもたちと一緒に、最後の署名を提出に行った時のことです。私は、府民の反対意思を教育委員の皆さんに理解してもらうために、みんなが一生懸命に集めた署名を、決定の府教育委員会議の場においてもらうよう頼みました。子どもたちが、私たちが血のにじむような思いで集めた署名でしたので、何度も何度も頼みましたが、どうしてもできないと断られました。自分たちが計画した統廃合案が、2ヵ月半で16万人という未曾有の世論の反対を受けた事実から、府教育委員会は目をそむけ、一切、修正や留保や撤回をしようとはしませんでした。

府教育委員の皆さんは、府教委事務局の言い分を鵜呑みにして、高槻南高校やその部活の実績・伝統、2学区や府立高校の中での高南の存在感を理解し、認識していなかったということが、平成13年8月30日廃校案公表後のいくたびかの府教育委員会議における論議からはっきりわかりました。府教委事務局は、教育関係者や2学区住民なら誰しもおかしいと感じる自分たちの案を正当化するために、高南や反対世論の意思を意図的に遮断していたと考えざるを得ません。

反対運動がはじまって2ヶ月ほどたった頃のことでした。私が仕事から帰ると、100枚以上(1000人分)の書名の束が届いていました。そして陸上部よりと12名の名前を連ねたメモが添えられていました。その日、陸上の大会があり、終了後疲れているにもかかわらず、街頭に立ちみんなで大きな声を張り上げ集めた署名でした。その頃私たち保護者の疲労もピークに達しており、子供たちの眼にも私が疲れているように見えたのでしょうか。その書名の束を見たら私が少しでも元気になうと思い届けてくれたものでした。一番傷ついているのは、自分たちなのに、生徒の母校をおもう真剣で愛情溢れる気持ちを思い泣きました。

そして、平成13年11月16日、子どもたち、私達の思いも何ら届くことなく、「統廃合=高南廃校」が正式に決定されてしまいました。今もそのときの

ことが、はっきりと私の脳裏に焼きついており、思い出すたびに、このことは、トラウマ、心的外傷として私の胸を深く痛めつけます。高南の子どもたちや他の父母も一緒だと思います。

府教育委員会は、署名の束を府教育委員会議の場に置いて教育委員の方に見てもらうことを拒否しただけでなく、子供たちには報告すると約束していたにもかかわらず、反対署名の数さえも、教育委員の皆さんに報告しませんでした。

開かれた府政とか、教育行政をいいながら、子どもたちや父母・PTA、地域世論の意見や要望を、一顧だにしない府教育委員会の閉鎖的で強権的な行政姿勢は、子どもたちと父母の心を深く傷つけずにはおかないものです。決定当日、いてもたっても折られず、授業終了後、駆けつけてきた女子生徒2人が署名の束が無造作に部屋の隅に積み上げられているのを見て、号泣していた声を、今でも忘れることができません。今でも私の耳に残っています。

その後、私たちは、「高南の存続をめざし今こそ力の結集を！！」のPTAスローガンを掲げ、「統廃合反対、高南の存続」を求める人々と一体となり、高槻、茨木地域を中心に、高槻市役所前での2回の集会、高槻及び茨木両市のJRや阪急の主要駅前での街頭署名、府、市議会議員への要望行動等の活動を行いました。その結果はわずか2ヵ月半の間で16万筆という驚異的な数の署名を集めることができたのです。また10月10日及び11月3日（同窓会と合同）には、教育委員会からの説明を受けました。しかし回を重ねるほど「なぜ、高槻南が統廃合の対象なのか」という疑問が深まるばかりで、残念ながら教育委員会の説明と私たちの主張とは、平行線で決してかみ合うことはありませんでした。

その間いろいろな疑問がありましたが、そのうち1つは、9月7日に市内の府会議員さんに陳情に伺った時のことでした。その議員さんは統廃合の相手校の島上高校出身で、ちょうどその日に同窓会総会があり、資料が今送ってきたばかりなのでお見せしましょうと私たちに配ってくださいました。その内容は、島上高校は近年中退率が高くなりこのままで存続するのが難しくなっている。

府立高校として生き残るためには市内の高校と統合して単位制の高校に変わる必要がある。その相手校として選んだのが高槻南高校と他2校の名前が書かれていました。

そのとき私はすぐ疑問を感じました。なぜ島上高校が優先でというか主導権を

もって相手校を選ぶのかと思った瞬間でした。

あわててその資料をまだ他の会員にも渡してないのでと回収されたのでした。その方もまだ目を通されてなかったようでした。

私たちもまだ日が浅く初めての議員さんへの陳情でしたのでそのまま帰ったのですが、今でもその時のことが心にひっかかっています。

最後に

私は平成13年8月30日から、現在に至るまで、子どもたちと共に運動し共に泣き、様子を見て参りました。

教育委員会の方々は一言で2校を統合するといわれますが校地・校舎・校名もなくなるいわゆる母校が廃校になる子ども達の心の傷がどれほどかということを考えられたことがおありでしょうか、大人の私たちの想像を絶するものであるということを、それでも彼ら彼女らは、けなげに、少しでも先輩たちの残してくれた伝統を守ろうと、寂しく、また不自由になっていく学校で頑張っているのです。

心の傷は時間と共に小さくなっていくかもしれませんが一生消えることはないのです。

心の教育を大切にすべき教育委員会が子どもの心をズタズタにしてしまった責任の重さを感じてください。

私は、また私と同じように考えている元PTA会長をはじめ保護者・先生・卒業生と共に、一人でも母校を守りたいという子がいる限り一緒に見守っていくつもりです。